

数式の多い面例を
一キロと一割

新しいはめん

若い時分

私は書物を読むとき悪い癖がある。なか

い間校正をや^{りつけ}たためか、^{であらう}英文教科書

誌の校正を^新本間もや^りす^せいた^そり^るが^るあ^る

~~い~~人な~~本~~を~~読~~ん^てい^る長所を^たり^る感^るあ^る

より^も芝^に、^とかく誤植が目についたり、

細^いしい^いが^い気になつて、^どう^もか^い

^いの^いである。^仕方^がない

つい^先月の^のこと、^日本^の十月^月で、^林

笑美子さんの晩年の作^とだ^いう、^短篇「天草灘」

を^読ん^でいた。^私とい^う一^人の婦人か、^波止

何^か

増から、旅館の奥に案内されて歩いていく。

「旅館は遠いの？」

「はい、六百米はうう、あう、ます。」

六百米と云われて、私は、どの位の遠さか

あるか判らなかつた。

「六百米って、一キロ位なの？」

「そんなにはあう、ません。」

「~~まだ~~ ~~まだ~~ ~~まだ~~、私はつとした。これは

と、~~考~~えても身辺の説と思われし、私とい

うのは笑美子さん自身に相違ない。
すると、

えい

海井

紙用稿原社論公央中

お出
し
り
初
章
ち
い
の
~~が~~
~~あ~~
~~る~~
林
さ
人
は
せ
な

林
を
九
葉
さ
小
七
人
ち
か
ら
、
林
さ
ん
を
こ
の
よ
う

いし
~~は~~は
小
河村
や
せ
る
村
の
算
数
考
の
欠

ア
ン
リ
ス
キ
て
~~あ~~
~~あ~~
~~あ~~
う
え
お

し
ふ
し
~~世~~
~~之~~
~~本~~
あ
ん
な
は
×
ー
ト
ル
坊
を
考
へ

現
實
の
本
で
は、
×
|
ト
ン
坊
を
亡
心
れ
て

大衆
丁上無子入生信の
あり困りた主キ、て
ゆかぬる

生と科学と
~~科学と~~
宗教を

い
な
い
こ
ろ
に
、
本
の
話
は
か
あ
の
で
は

な
い
か

ふ
ゆ
め
の
算
数
や
白
紙
二
枚
の
と
り
で

林さんの場合なら
考へてみると、

いは、^{（ア）}人間形成の上に、^{本能的には、}とけだけの

役割をはた^{（イ）}てあろうか。

こんなことを考え^{（ロ）}てみる。

んだが、ハスカル^{（ハ）}精神

幾何学の精神と^{（ニ）}繊細の精神のことである。

幾何学の精神は^{（ヘ）}、^{（ニ）}繊細の精神

確証的^{（ホ）}で^{（ヘ）}理性的

で^{（ヘ）}心情的な^{（ヘ）}繊細の精神を、^{（ヘ）}形式的に^{（ヘ）}規定するの

は^{（ヘ）}あ^{（ヘ）}ず^{（ヘ）}か^{（ヘ）}しい。^{（ヘ）}（一九二五年に

け^{（ヘ）}の^{（ヘ）}フ^{（ヘ）}ラ^{（ヘ）}ス^{（ヘ）}と^{（ヘ）}著^{（ヘ）}者^{（ヘ）}令^{（ヘ）}の^{（ヘ）}一^{（ヘ）}節^{（ヘ）}）

「完全な人間、すなわち科学的教養と文藝的
教養とが平衡を保ち、幾何学の精神と機械の
精神とが統一された人間」といふ言葉は、
二十世紀の精神の文藝的精神とで
現代では、この二つの外に、もう一つ、社
会精神といふものがある。加へるべきである。
林芙美子さんは、この三つの中で、機械の
精神が最もよく発達していたが、幾何学の精
神は不十分であつた、といふことがあつた。こ
れである。

本百合子さんとは、
 秘蔵のこの三冊を備え

ていた。これは戦後の精神がいくぶん弱

かつた。知るべき。

と見る人があつた。

ところでは、手元にある『文藝春秋』十一月

号を流し、亀井勝一郎さんの文章の中

に、青森の文藝講演会では、清室が話をして

「聴衆千二百名ぐらゐ、青森の人口の一割

である」

とある。私はおやつと思つた。
 さんには文藝

書かっさい

ある程まで

講演会が盛んであつたとしても、
~~青森市~~ 市の人

口の十分の一を集めたなんて、
 そ小は ~~だ~~

!

~~青森市~~ 小学校

そこで私は六年生の孫が持つていゝ少年

朝日新聞 (昭和二十七年版) を見ると、

~~青森市~~ の人口は一〇万六四一七とある。

~~青森市~~ 一割は誤りであつた、一パーセント

とすぐきびある。

林芙美子さんの場合とちがつて、亀井さん

のよくな名高き評論家は、

戦後の精神や社会の精神 ~~は~~ ~~共~~ ~~論~~

尾形

立松

法的 ~~で~~ 理性的な幾何学の精神 ~~の~~ 持主 ~~は~~

すが。 ~~が~~ なることがあり ~~る~~、 亀井さんが一

割と一パーセントとの区別を知らないとはい

考えら ~~る~~ ない。 ~~は~~ 決 ~~して~~ ~~は~~ ~~る~~ 思

い違 ~~い~~ ~~で~~ ~~は~~ ~~る~~、 大抵の書き ~~は~~ ~~る~~ ~~か~~ ~~い~~ ~~と~~ ~~思~~ ~~は~~ ~~る~~。

それとい ~~う~~ ~~の~~、 ところ ~~は~~ ~~い~~ ~~った~~ ~~新~~ ~~文~~ ~~は~~ ~~力~~ ~~を~~ ~~入~~

小 ~~す~~、 ~~い~~ ~~い~~ ~~加~~ ~~減~~ ~~に~~ ~~書~~ ~~き~~ ~~と~~ ~~ば~~ ~~し~~ ~~た~~ ~~か~~ ~~ら~~ ~~で~~ ~~あ~~ ~~ろ~~ ~~う~~。

し ~~し~~ ~~し~~ ~~つ~~ ~~は~~、 ~~そ~~ ~~こ~~ ~~に~~ ~~内~~ ~~証~~ ~~が~~ ~~あ~~ ~~る~~ ~~の~~ ~~で~~ ~~あ~~ ~~る~~。 ~~そ~~ ~~う~~ ~~な~~

文 ~~学~~ ~~者~~ ~~と~~ ~~い~~ ~~う~~ ~~の~~ ~~は~~、 ~~い~~ ~~ん~~ ~~ち~~ ~~な~~ ~~こ~~ ~~の~~ ~~あ~~ ~~つ~~ ~~き~~ ~~の~~ ~~文~~ ~~章~~ ~~を~~ ~~粗~~ ~~末~~ ~~に~~ ~~い~~

て ~~は~~ ~~な~~ ~~る~~ ~~な~~ ~~い~~、 ~~と~~ ~~い~~ ~~う~~ ~~こ~~ ~~の~~ ~~や~~ ~~内~~ ~~外~~ ~~境~~ ~~を~~ ~~こ~~ ~~え~~ ~~る~~ ~~な~~

ということ

我のよう

が

ことであつ

甚だ

ことをいふのは、~~書~~口はな~~ら~~うまいよるで、おこ
がましいが、~~おま~~り野暮なことはいふな~~い~~つ

もりである

はつきりした

の理

ち~~り~~て~~も~~いふ~~は~~、~~誤~~り~~は~~、編集者が校正の~~所~~

には、音して

を

すづきものだと~~思~~う

に~~こ~~う~~程~~

交の誤りに~~は~~か~~な~~いよるを編集者~~よ~~つて、

自今

~~作~~書物~~が~~作ら~~れ~~て~~は~~、お断りし

たいものである。

何~~と~~かし